

第三十六回 姜維陣を門わけて鄧艾を破る、曹髦車を駆つて南闕に死す

—— 高貴郷公の抵抗 ——

(解説)

蜀では、諸葛亮の後、蔣琬と費禕が続いて政治にあたります。諸葛亮が後継として指名しただけあつて、いずれも魏に対抗しつつ、うまく蜀のかじとりをします。

蔣琬や費禕は、度重なる北伐で疲弊した蜀の国力の安定に力を注ぎます。しかし、諸葛亮が指名した後継者も費禕までで、その後は、蜀の内政と外政全体をまとめて指導する人物がいなくなります。費禕が魏の降将によつて殺されると、姜維が大將軍として軍権を握る一方、内政は陳祗が取りしきります。

姜維はそれまでも渭水方面への進出を凶っていました。費禕の死後は、諸葛亮の遺志実現を掲げ大規模な北伐をくりかえすようになります。この姜維に対抗するのが、魏の名將鄧艾です。姜維は二十万の大軍を率い、祁山に向かいます。一方、鄧艾は、姜維が祁山に向かうことを予想して待ちかまえます。

(本文)

翌日、兩軍は祁山の前で対陣した。姜維は諸葛亮の「八陣の法」によつて、天・地・風・雲・鳥・蛇・龍・虎の陣をしいた。鄧艾は馬を出し、姜維が「八陣の法」によつて布陣しているのを見ると、自分もまた八陣を布き、左右前後に同じように陣門をかまえた。

姜維は鎗をもち馬を飛ばして大声で叫んだ。

「おまえは私の『八陣の法』の真似まねをしているが、陣形を変えることはできるまい」

「この陣はおまえしか布けないとも思っているのか。この布陣ができる以上、変えることぐらい知っているぞ」と鄧艾は笑った。

鄧艾はただちに馬首をめぐらし自陣にもどるや、旗持ちに命じて旗を左右にふらせ、八八六十四の門戸を作らせると、ふたたび陣營の前に出て来て言った。

「どうだ、見たか」

「わるくはないが、それで私の八陣を包围できるか」と姜維。

「もちろんだ」と鄧艾。

かくして、兩軍はそれぞれ隊列を組んで前進し、鄧艾は中軍にいて指揮をした。かくて兩軍はぶつかりあつたが、両者の陣形は少しも乱れなかつた。

と、姜維が真ん中で、さつと旗を一振りするや、たちまち「長蛇捲地の陣」に変化し、鄧艾をまんなかに取り囲んで、四方からあたりを震わす関の声をあげた。

鄧艾はその陣法を知らず、あつと仰天していると、蜀軍がじりじり接近して来た。鄧艾は諸将を率いて斬つてでようとするが、出ることができず、蜀兵がいつせいに「鄧艾よ、さつさと降伏せよ」と叫ぶ声に、鄧艾は天を仰いでため息をつきながら言った。

「自分の浅はかさから、姜維の計略にはまってしまった」

そのとき突然、西北の角から一手の軍勢がどつと突入し、魏軍だと見てとつた鄧艾は、その勢いに乗じて斬つて出た。鄧艾を救出したのは、司馬望だった。

(※そして翌日、また両軍が陣法を戦わせている間に、鄧艾は背後から姜維を攻撃しようとしませんが、姜維はそれを見抜き、山かげに伏兵をおきます。)

翌日、姜維は九つの陣営の軍勢をすべて繰り出し、祁山の前に布陣した。司馬望は軍勢を率いて渭水の南岸から、まっすぐ祁山の前まで攻め寄せ、馬を出して姜維に話しかけたところ、姜維は言った。

「私と陣法を戦わせたいのなら、まずおまえが布陣して私に見せろ」

司馬望が「八卦陣」を布くと、姜維は笑って言った。

「それは私が布いた『八陣の法』と同じではないか。おまえは真似まねをしているだけだから、珍しくもないぞ」

「おまえこそ他人の陣法を盗んだだけではないか」と司馬望。

「その陣には幾通りの変化があるのか」と姜維。

「すでに布陣している以上、変化させられるのは当たり前だ。この陣は九九八十一通り、変化するのだ」と司馬望は笑って言った。

「では、やってみせろ」と、姜維も笑って言った。

司馬望は陣に入って数回変化させると、また陣から出て来て言った。

「わが陣が変化したのがわかるか」

「私の陣法は一年の日数に合わせ、三百六十五通りに変化する。おまえなんぞは井いの中なかの蛙かわずにすぎず、陣法の真髓しんずいがわかるわけがない」と、姜維は笑って言った。

司馬望はそうした変化の法があることは聞いていたが、会得えとくしていなかったので、むりに強弁きやうべんして言った。

「それなら、おまえが変化してみせろ」

「鄧艾を出せ。やつ目の前でやってやろう」と姜維。

「鄧將軍には別に妙策みょうさくがある。陣法は好まれないのだ」と司馬望。

「妙策などあるものか。やつは、おまえを使つて私を騙だまし、ここで陣を布かせておき、その隙に軍勢を率いて、山かげからわが方を急襲しようとしているだけだ」と、姜維は笑いながら言った。

司馬望は仰天ぎょうてんして、一気に乱戦に持ち込もうとしたとき、姜維が鞭でさつと指し示すと、両側から軍勢が出撃し攻めたため、魏軍の兵士は鎧かぶとや戈ほこを投げ捨て、命からがら逃げ出した。

一方、鄧艾は先鋒の鄭倫ていりんを急せきたて、山かげから襲撃させようとしていた。鄭倫が山すそをまわると、ふいに石火矢いしびやの音が一発鳴りわたり、太鼓や角笛つのふえが鳴り響いたかと思うと、どつと伏兵ふくへいが出撃して来た。先頭の大將はこれぞ廖化りょうかである。

二人（鄭倫と廖化）は言葉をお互いしごもあそばこそ、両馬が馳せちがった瞬間、廖化は一刀のもとに、鄭倫を馬から斬り落としていた。鄧艾が急いで手綱たづなを引き締め、退却にかかろうとしたとき、張翼ちやうよくが一手の軍勢を率いて殺到して来た。両方から攻め立てられて、魏軍は大敗を喫し、鄧艾は命からがら斬りぬけたものの、身には四本の矢が突き刺さっていた。

(解説)

かくして、鄧艾は緒戦しよせんで大敗を喫しますが、「反間の計」はんかんで蜀を混乱させることに成功します。

姜維が魏に投降するとの流言りゆうげんを拡げたくえで、蜀の劉禪りゆうぜんが宦官黄皓こうこうを寵愛ちやうあいしていたのにつけこみ、賄賂わいろを黄皓におくつて姜維をよび戻すよう仕向けます。成都に呼び戻された姜維は、劉禪に鄧艾が仕掛けた「反間の計」に引っかけたのだと言いますが、劉禪は黙り込んだまま何も返答できませんでした。

一方、魏に目を転じると、司馬氏の権力はますます強大となり、九錫きゅうせき（皇帝位につく一歩手前の特典）を要求するなど、篡奪そうさつまであと一歩に迫ります。高貴郷公曹髦こうききやうこうそうぼう（魏の第四代皇帝）は、曾祖父曹操の面影がある決断力ある青年でした。高貴郷公は、側近の重臣王沈おうしん、王經おうけい、王業おうぎように司馬昭討伐の計画を打ち明けます、しかし、王沈と王業の二人は身の危険を避けようと、協力するどころか、その足で司馬昭のもとへ行つて密告します。

(本文抄)

曹髦は、侍中の王沈、尚書の王經、散騎常侍の王業の三人を召し寄せて相談し、涙ながらに言った。

「司馬昭が篡奪の心をもっていることは、誰もがみな知っている。朕はこのまま座して廃位の屈辱を受けることはできない。朕は司馬昭を誅殺しようと思うので、力を貸してもらいたい」

「いけません。昔、魯の昭公は季氏の専横に短気をおこし、敗走して国を失うことになりました。今、大権が司馬氏に帰してからもうずいぶんになり、内外の重臣のうち、順逆の道理を顧みず、奸賊に阿諛追従する者は数多くおります。また、陛下をお守りする者は数少なく、ご命令に応じる者もおりません。もし短気をおこされれば、大きな禍がふりかかります。しばらくは自重されて事を運ばれるべきです。軽率に事をおこされてはなりません」と王經。「『是れをしも忍ぶべくんば、孰れをか忍ぶべからざらん（これががまんでできるなら、世の中にがまんでできないことなどない）』（『論語』八佾篇）だ。朕の心はすでに決まている。命など惜しくはない」と曹髦。

曹髦は言いおわると、そのまま奥へ入り太后にこれを告げた。

王沈と王業が王經に言うには、「事態は切迫している。われらは一族滅亡を待つより、司

馬公（司馬昭）のもとに出頭し死罪を免れようではないか」

王綰は激怒して言った。

「主君が憂いを抱かれれば、臣下にとつて恥辱であり、主君が恥辱を受けられれば、臣下は死ぬしかない」と言うではないか。どうして裏切ることができようか」

王沈と王業は王綰が同意しないと見るや、ただちに司馬昭のもとへ注進に駆けつけた。

しばらくして、曹髦は奥御殿から出ると、護衛の焦伯に命じて、殿中に詰めている三百人余りの下僕を集合させ、軍鼓を打ち鳴らして出撃した。

曹髦が劍を握つて車に乗り、左右の者を叱咤しながら南の宮門を出ようとしたとき、王綰は車の前にひれ伏し、大声で泣きながら諫めて言った。

「陛下はわずか数百人で司馬昭を討伐しようとしておられますが、これは羊を虎の口に追い込むようなもので、無駄死にするばかりです。私は命が惜しいわけではありません。失敗が目に見えているから申し上げるのです」

曹髦は「わが軍勢はすでに出陣した。止めだてするな」と言い、龍門へと向かつて行つた。そこへ、鎧かぶとに身を固め馬に乗った賈充が、左に成倅、右に成済を従え、数千の甲冑に身を固めた近衛兵を率いて、鬨の声をあげながら押し寄せて来た。

曹髦は劍を抜いて、大声で怒鳴りつけた。

「われこそは天子である。おまえたちは宮中に突入し、天子を殺す気か」

近衛兵は曹髦の姿を見るや、みな先へ進もうとしなくなった。と、賈充は成済せいさいを呼んで言った。

「司馬公がおまえを養つて来られたのは、何のためか。まさしく今日のためだぞ」

成済は戟げきをつかむと、賈充かじゅうの方をふりむきながら言った。

「殺しますか。生け捕りにしますか」

「殺せ。司馬公の命令だ」と賈充。

成済がまっすぐ車の前に躍おどり出ると、曹髦は大声で怒鳴りつけた。

「無礼者、控えろ」

その言葉が終わらないうちに、曹髦は成済の戟で胸を突き刺され、車から転がり落ちるところをもう一回突き刺されて、曹髦は息絶えたのだった。

司馬昭も、わざとうそ泣きをしてたずねた。

「今日の事は、いったいどう始末をつけたらよいだろうか」

「賈充を斬れば、いささかなりとも天下に謝罪できるでしょう」と陳泰ちんたい。

司馬昭はしばらく考え込んだ末、またたずねた。

「もう少し穏やかなやり方ないものか」

「今、申し上げた方法よりも厳きびしくはなっても、穏やかな方法など思いうかびません」と陳泰。

「大逆不道の成済を凌遲りょうちの刑（五体を切り離す極刑）に処し、やつの一族を皆殺しにせよ」と司馬昭が言うと、成済は大声で司馬昭を罵ののしって言った。

「私の罪ではない。賈充がおまえの命令だと言ったのだ」

司馬昭はまず成済の舌を切り取らせたが、成済は死ぬまで無実だと叫びつづけた。弟の成倅せいすいもまた市場で打ち首にされ、その一族は殺し尽くされた。

司馬昭はまた、王経の一家を捕らえて投獄させた。王経が廷尉ていゐのところ（裁判所）にいると、母親が連行されて来た。王経は地面に頭を打ちつけ、泣きながら、「母上にまで親不孝な息子の累るいがおよんでしまいました」と言うと、母親は笑って、

「人はみな死ぬものです。おそろしいのは死に場所を得られないことです。今回のことで命を棄てることには、何の心残りもありません」。

翌日、王経の一家は東の市場に引き出された。王経母子は笑おやこみを浮かべながら首をはねら

れたが、洛陽らくやう中の人々は、涙を流さないものはいなかった。

(解説)

司馬氏の専横せんおうを憤いきどおった高貴郷公こうききやうこうは、わずかな手勢を率いて出撃しますが、司馬昭の側近賈充かじゅうが、おまえたちを養つてきたのは今日のためだと部下の成済を叱咤し、これを真まに受けた成済が高貴郷公を刺し殺しました。しかし、司馬昭はその罪をすべて成済に押し付け、一族もろとも殺してしまいます。しかも、ただ一人密告しなかった王經とその一家まで殺してしまいます。本当に後味の悪い、司馬氏の血なまぐさい篡奪劇さんだつげきです。

この高貴郷公の死について、『三国志』の本文は「五月己丑きしうの日、高貴郷公が亡くなった。年二十」と記し、その後こうたいしうに続いて皇太后の詔令しよくれいで、彼が死去するに至った事情を書いていません。

それには、高貴郷公は性情せいじやう荒々しく道にはずれ、皇太后毒殺を凶って失敗し、さらに挙兵して皇太后と司馬昭を襲撃しようとしたが、先鋒隊によって殺害されたと書きます（「高貴郷公紀」）。

しかし、この欺瞞きぼん的な公式発表を信じる人は、誰もいませんでした。

はいしやうし

裴松之は本文の注で、「漢晋春秋」の記事が筋道がたっているとして、それにもとづい

て高貴郷公の死に至る顛末てんまつをかいています。

『三国志演義』の、賈充が成済に「殺せ。司馬公の命令だ」というところが、「漢晋春秋」では「今日のごとは、あとから問題にしない」という表現になるなど、一部違いはありますが、おおむね本文抄と同じ内容になっています。また、「漢晋春秋」を補足ほぞくする形で、他に四つの書籍を注として引いていますので、このとき高貴郷公が非業ひごうの死を遂げたというのは、広く認識されていたことなのです。

結局、賈充かじゆうの言葉を信じた成済せいさいが貧乏くじを引き、すべての責任をかぶせられて一族ともども処刑されてしまいます。『三国志』は、「成済兄弟は肌ぬぎになって屋根の上に逃げ、悪口雑言をあびせたが、下から矢を射かけられて倒されてしまった（「魏氏春秋」）」と書いています。「大の虫を生かすためには小の虫は殺す」という、権力の非情さを浮き彫りにする場面です。

「知己ちきを千載せんざいの下に待つ」という言葉がありますが、後世、司馬昭かじゆうと賈充かじゆうは希代きだいの悪役として罵ののしられ、一方、果敢かかんに戦い散っていった高貴郷公の姿は、魏王朝最後の輝きとして語り継がれていきます。